

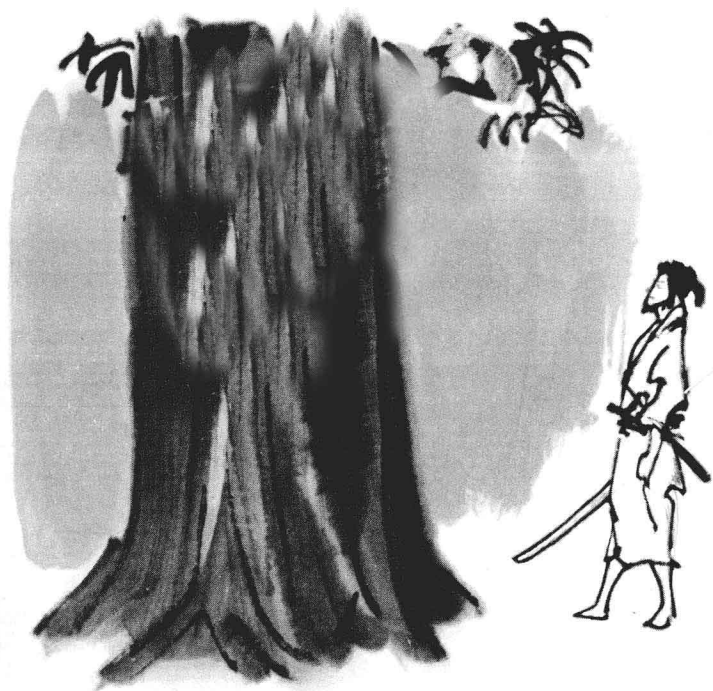
塚原卜伝

中山義秀



豚原卜伝

中山義秀



講談社

塚原ト伝

昭和31年11月10日 第1刷発行 © ㄥ 250

著 者 中 山 義 秀

東京都文京区音羽町 3-19

発 行 者 野 間 省 一

東京都港区赤坂溜池 5

印 刷 所 株式会社 技 報 堂

代表者 大 沼 正 吉

発行所 東京都文京区 音羽町 3-19 株式会社 大日本雄弁会講談社

落丁本・乱丁本はお取りかえいたします。 (大進堂製本)

目次

鳳雛	：	：	：	五
まひるの星	：	：	：	三〇
廻転楽	：	：	：	五
片雲	：	：	：	三
毒蝶	：	：	：	二〇
さすらい	：	：	：	一五
天運	：	：	：	一六
朝露	：	：	：	一六
海鷺	：	：	：	三一
真夏の夢	：	：	：	三三

装
幀
杉
本
健
吉

塚
原
卜
伝

鳳 雛

一

京の祇園祭が、数日後にせまつてきた旧暦六月の夕暮である。

鴨の河原に面した七条のほとり、さる武家屋敷の内庭で、七、八人の人々が互に木刀をとり、組太刀の稽古をしている。

二十代の若者達だ。中に一人、十六、七歳ばかりの片眼の少年がまじっている。他にこの屋敷の主人らしい、五十年配の武士と、兵法の指南者と思われる、三十代の総髪（おんがみ）の男。

打太刀、仕太刀と分れて、一組の稽古がすむと、次の組が入れかわつて立合う。総髪（おんがみ）の男が、側につき添つて、太刀取の構えをなおしたり、足の運びに注意をあたえたりしている。

六、七人の仲間の中では、片眼の少年が格段に強い。二十代の壮士達がみな、彼に齒がたたなかつた。片眼で身体も大きくはないのに、太刀さばきが輕妙をきわめている。

打太刀の木刀は、長さ二尺五寸、仕太刀は一尺八寸。つまり、ほぼ大小の長さにあたるわけだ。それにしても大太刀の打にたいして、小太刀をもつて受にまわるのは、小太刀遣いを眼目とする流儀と思われる。おそらく中条流か、京流に違いあるまい。

人々が我を忘れて、熱心に稽古をはげんでいる時、中門の柴垣に身をよせて、それを見物している男があつた。

涼みがてら鴨川へりに出てきた者が、人々の太刀打姿を認めて、ことわりもなく中庭に入りこんできたと見える。

座敷の縁ばなに腰をおろして、団扇を片手に蚊を追いながら、若者達の稽古を見ていたこの家の主人が、ふと外来者の姿に目をつけ、

「こりや、そこにいるのは、何者ぞ」

するとその男は、小腰をかゝめて、主人はじめ人々に挨拶しながら、

「怪しき者では、ありません。このわたりに住む、兵法執心の者でござる。あまり御稽古の面白さに、ついお屋敷内に立入りました。御勘弁のほどを、お願いいたします」

そう云つて詫びる相手は、二十を出たばかりらしい若侍である。白い帷子かたびらの着流しに、一尺余の脇差と扇ばかりを、腰にさしているところを見ると、なるほど近所に住んでいる者が、ぶらりと涼みに出てきたような恰好だ。

素直に詫びられてみれば、そのうえ咎めだてすることもならず、

「兵法執心とあるならば、その方の心得があるう。丁度よき折じや。この者達と、立合つてみる

がよい」

主人のその言葉に、相手は卑下して、

「執心と申しても、いまだ未熟の某^{それがし}、到底お歴々のお相手は出来ませぬ。たゞこの儘、お見のがしおき下さい」

「いやいや、そうではあるまい。先程よりの物腰、一通りの遣い手と思われる。なにも稽古でござる。遠慮めされるな」

主人の後に続いて、相手にすゝめたのは、指南役の総髪^{しやうはち}の武士である。その上のつびき云わさせないために、稽古の若侍達の中から、片眼の少年を呼びだして、

「大林、この方のお相手をいたせ」

「畏りました」

少年はためらわず、一尺八寸の木刀をとり、

「いざ打込んでござれ」

そういう彼は、少からず自信があるらしい。相手は致しかたなさそうに、前におかれた二尺五寸の木太刀を取上げ、

「さらば、お相手をお願い申す」

二

木刀を握ると、彼の姿がにわかに、別人のようになった。彼は下目半眼に、少年の姿勢を窺い

ながら、微笑をうかべて、少年に云つた。

「そのお構えでは、こなたの太刀が、入りやすいように見えてござる。お直しなされずとも、宜しゅうござるか」

そう注意されて少年は、正眼にかまえた太刀先を、少し上にあげた。

「それでも、危のうござる」

これでは彼の指導を、受けているようなものである。仕太刀を勤める、資格がない。仕太刀は相手の打をうけ、後の変に応ずるものだ。上位者が、勤めるもの。

少年は相手の云いぐさに、仲間の手前、侮辱を感じたらしく、

「ともかく、打込んで来られい」

その言葉が、終るか終らない間に、相手の太刀が少年の左の肩を打つた。強くはないが少年の身体が、すこし後にゆらいだ。強ければ肩の骨が、折れてしまったであろう。

男の様子をじつと見詰めていた人々は、思わずどよめきの声をあげて、

「やア、打つた、打つた。思いのほかの早業よ」

そうであろう、彼等と腕に格段の差のある少年が、てもなく打込まれてしまったのだから。

人々の指南役らしい総髪の方が、彼の太刀筋に、何か考えるところあつた模様で、みずから小太刀をとりあげ、

「面白い。こんどは拙者が、お相手を致そう。さア、打込んでござれ」

彼は一尺八寸の木刀を、片手上段に構え、太刀先を頭上でぐるぐると廻している。いわゆる水

車劍というもので、彼の流儀の極意とするところのようである。

相手が二尺五寸の木刀で打込んでくれば、半身を開いてその太刀を押え、飛び入つて斬る。小太刀を水車のように廻しているのは、手を見せず相手の眼をくらませて、後の先をとる心得と思われる。

しかし、男の方が強かつた。指南の総髪は振上げた手の肱を打たれ、腕がしびれたらしく、小太刀を取落した。

彼の眼にもとまらぬ太刀先には、極意も何もあつたものではない。見物の人々があつと息をのんだ時、見知らぬ男は指南役の前に畏つて、

「これは、思わぬ僥倖をえました。明晩また参上して、御指導をいただきます」

そういうなり、つと身を起して、中門の方に寄つたかと思うと、そのまゝ夕闇に姿を消してしまつた。太刀先も速かつたが、姿をくらすのも速い。

「市川妙斎」

屋敷の主人は、指南役の名を呼んで、

「今のは、伺じや。近辺の者と申したが、ついぞ見かけたことがない。まさか鞍馬あたりの天狗が、そちの妙技をためしに参つたのではあるまいな」

妙斎は皮肉を云われて、苦笑を浮べながら、

「御戯談を云われます。しかし、いかさま覚えの者、跡をさがさせましようか」

「捜しても、むだであろう。いずれそのうち、何処かで見つかるに相違ない。右眉上の黒子ほくろが、

目当じや。なににしても、ほしい男よ」

主人は彼に、何か期待するものが、ある様子である。同様に肩を打たれた片眼の少年も、彼の早業に心をひかれてゐる風で、姿を隠した彼の方向を、茫然と見おくつていた。

三

旧暦六月七日、いよいよ祇園祭の当日である。

八坂神社の祇園祭は、ながらく途絶えていた。応仁、文明の戦乱のためである。

十一年もつゞいた戦争が、やつと終つたと思つたら、今度は二代つゞいて、京都將軍と近江の守護、六角氏との喧嘩だ。

それに続いて、細川、畠山兩管領の間に、勢力争いがはじまる。畠山の側が負けると、細川父子の仲で、内輪揉めがおこつた。

いつになつても、戦争の種子がつかないどころか、世の中はますます乱れてゆくばかり。京都からその争いが全国にひろがつて、何処もかも蜂の巣を壊したような騒ぎになつてゐる。

京都市民は家を焼かれ、家財をうしない、三、四十年もつゞいてゐる戦争に、すっかりあききしてしまつて、なかば焼けくそになつてゐた。

「一期は夢よ、たゞ狂え」

そのような氣持で、刹那の遊びと享樂をもとめる。祇園祭も一時は断絶したが、戦火の中から復活してきた。

山棚に飾鉾をおしたてて、祇園ばやしを奏しながら、市内を練りあるく。

この山鉾を氏子の町衆が、勝手に練り渡すことは、將軍から禁じられていたが、ひきつゞく動乱に、町衆はそのような命令を、馬鹿正直に守つてはいなかつた。

第一、將軍が逃亡してしまつて、京都にいない。九代將軍義尚よしひさは、六角高頼を討つために、近江に出征してその地で亡くなつた。

十代義植よしたねは、管領の細川政元に追われて、越中へ走り、越前へ逃げ、ついに周防まで落ちて行つて、大内義興を頼つた。

義澄がその後をおそつて、十一代目の將軍となつたが、前將軍の義植が、大内義興のひきいる数万の大軍に護られて、周防から東上してくると、近江へ逃げだして六角高頼の懷に飛びこんだ。

これが昨年の出来事で、今は義植がふたゝび京都の將軍職につき、大内義興が管領として、采配をふつている。

今年の祇園祭は、この將軍の下で行われるわけだ。山鉾や神輿の渡御には、武者行列がつく。

鎧武者である。それに義興のつれてきた、山陽、山陰、九州などの田舎武士が、面白ずくで参加した。

武者行列の先頭が、祇園の社頭に近づいて来た時である。楼門の上から突然、田舎武士の頭上に、石つぶてが飛んできた。

彼等は胴丸や腹巻はしているが、兜はかぶつていない。乱髪でなければ、折烏帽子をしているだけである。

それに牽し大の石を、投げつけられてはたまらない。素頭なれば皮が破れて血をふくし、烏帽子をかぶつていても、ぐわんとくれば思わずよろめき、眼さきから火花が出る。

「だッ、だッ、誰だア。こ奴等、何をしやがる」

彼等は様門から、つぶてが飛んできたとは、気づかなかつた。四条通りから参道の両側は、いっぱいの人だかり、境内の中も身動きならないほど、見物の群集で埋つている。

石はそれ等の中から飛んできた、と彼等は感違いした。群集の中には、彼等の敵方の者がまじつてゐるに違いない。そ奴等が投げたと思つたから、彼等は激怒した。

「ようし、どうするか、覚えていやがれ」

彼等はやにわに太刀を抜き、槍をふりかざして、群集の中へ暴れこんだ。

四

祇園の裏は、真葛の原である。

応仁の大乱このかた荒れはてて、在家は一軒もない。山深く二、三の寺々が木の間に隠見するばかり、狐狸でも棲みそうな、寂しい山野の姿をていしている。

白川が法勝寺址の前を、北から西をまわつて南へ流れ、円山の麓からわきだす吉水の泉が、かなり大きな池となつて藻をうかべ、その藻にのつた蛙が、閑寂な鳴き声をあたりに響かせている。

この池のほとりを通つて、祇園の方へ行こうとしている、大兵の武士があつた。

白麻の帷子に、袴の股立をとり、脚半、藁草履、浅い編笠をかぶり、大小の刀をぶつ違ひに、

腰にさしている。

五尺六、七寸あろうと思われる身の丈、逞しい身体つきとすこやかな足どり、いかさまひとかどの荒者の体にみえる。年はまだ若い。

池の端の芝生に腰をおろして、池中にむらがつている蛙の動きを見ていた少年が、武士の姿に気がつくと、しばらくその様子を窺っていたが、武士がこちらへ近づいてくるなり、つと身を起こしてその前に走つていつた。

「とうとう、お会い致しましたな。随分捜しました」

そういう少年の態度は、すこしも悪びれたところがなく、むしろ人なつツこいくらいだ。

「やア」

武士は歩みをとめ、編笠の下から少年を見おろして、

「あの時の若衆よ。肩は痛みはせぬか、はゝゝゝゝ」

と笑う。これも、親しげな態度である。武士は数日前、七条の武家屋敷へ断りもなく入りこんできて、手合せに無類の早業をみせ、そのまゝ姿を隠してしまつた男だ。

少年は、その時相手になつた片眼の門弟。武士の言葉に、少年は力みをしめして、

「あのくらいで、痛みはしませぬ。しかし、いかにも残念に存じました」

「それで今一度手合せしたいと、拙者を捜していられたのか」

少年は首をふり、

「いゝや、左様ではありませぬ。師匠もおよばぬお手並は、あの時よく分りました。ついてはお

行方を尋ねだして、一手なりとも兵法の御教授にあずかりたく、念願をこめていた次第なのです」
「ふうむ、それは又、近頃奇特な志」

武士は黒い、つぶらな眼許で、少年の姿を見直しながら、

「しかし、拙者はまだ修業中の者、人に教えるほどの腕は持たない」

「そう、おつしやられるとは存じましたが、これからどちらへお越しになれますか」

「祇園祭を、見物しに出てまいつた」

「それは、およしなされませ」

武士は、少年の言葉を怪しんで、

「よせとは、又なぜじや」

「今に、騒ぎが持ちあがります。あの雑沓では、夥しく怪我人が出ましよう。君子、危うきに近
よらず、こちらへお出下さい」

少年は今まで休んでいた池畔へ、武士をつれて行つた。そこは涼しげな、木蔭になつている。

少年の動作は、年に似合ず大人びていた。云うことも、ませている。もつとも元服は、一、二
年前にすんでいるのであろうが、身体が小柄なためそんな風に、感じられるのかも知れない。

五

「お手前の生国は、いずこじや」

武士はこの少年に興味をもつたらしく、彼の後について木蔭の芝生に腰をおろしながら、そう